

飲酒（陶潜）

廬を 結んで 人境に 在り

而も 車馬の 喧しき 無し

君に 問う 何ぞ 能く 爾るやと

心 遠ければ 地 自ら 偏なり

菊を 采る 東籬の 下

悠然として 南山を 見る

山氣 日夕に 佳く

飛鳥 相 与に 還る

此の 中に 真意 有り

弁せんと 欲すれば 己に 言を 忘る

結廬在人境 而無車馬喧

問君何能爾 心遠地自偏

采菊東籬下 悠然見南山

山氣日夕佳 飛鳥相與還

此中有眞意 欲辯己忘言

解説 自然に親しみ、自然と一体の境地にはいつた心情を述べた詩。

語釈 ※廬Ⅱいおり、隠遁者が住むような家。※人境Ⅱ人里。※而Ⅱそれな

のに。※車馬喧Ⅱ訪問客の車馬の騒がしさ。※君Ⅱここでは陶潜自身。

※何能Ⅱどうして〜していられるか。※爾Ⅱそうである。然と同じ。

※偏Ⅱへんびな所。※南山Ⅱ南の方に見える山。廬山をさす。

※山氣Ⅱ山のかすみ。※日夕Ⅱ夕方。※此中Ⅱこのような生活の中に。

※欲弁己忘言Ⅱ自然と一体のその境地を説明しようとすれば、早くもその言葉

通釈 隠者は山中に住まいするが、私は粗末な家を、人里に構えている。そ

れなのに、役人たちの乗る車馬の往來の騒がしさもない。君に聞くが、どう

してこのような騒々しい人間世界に住んでいて、静かにしていられるのか。私

は心が人里から遠く離れているから、住む土地も自然に辺鄙な場所になるの

だ。菊の花を、東側の垣根のもとでとり、頭をあげては、ゆったりとして南山

を見える。山の霞は夕方には殊のほか美しく、飛ぶ鳥も互いに連れだつて

ねぐらに帰って行く。のどかな風景に心の安らぎを覚える。このような情景

の中にこそ人生の本当の意味があるのだ。それを言葉で表そうとすると、は